

# 擬物語と社会相

(一)

後 藤 重 巳

「行く川の流れば絶えずして、しかも元の水にあらず。流れに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまるためしなし……」

とは、有名な鴨長明の方丈記冒頭の記である。

しかし

「おく質の流れは、請はずして、しかも元も利もあげず。米屋そりやるうちまきは、かつぎれ、かつあがりて、久しくさがる事なし……」

となると、少々妙なものになる。

これは、擬物語（にせものがたり）収中、今長明作、大方丈記（窮施行）なるものの書き出しである。

近來、自蔵の書中に含まれている擬物語を久々に目にする機会を得たので、「擬物語と社会相如何」と云う問題について感じた事を書き記るして見た。

一

明治四十四年八月三十日、国書刊行会発行の近世文芸叢書第七巻は、擬物語類を収録している。

煩わしいが、その全てを一覧すると

- 一、仁勢物語 二巻
  - 一、伊勢物語ひら言葉 四巻
  - 一、仁勢物語通補抄 一巻
  - 一、おさな源氏 十巻
  - 一、紅白源氏物語 六巻
  - 一、犬の雙紙 二巻
  - 一、おちくぼ物語 二巻
  - 一、寛潤平家物語 六巻
  - 一、吉原つれづれ草 五巻
  - 一、新つれづれ草 一巻
  - 一、茶人つれづれ草 一巻
- 以上草子類を戲作化した八種十九巻、古物語の梗概を示した作品四種二十二巻を収めている。

この各巻を、当叢書の緒言に依り、作者及び梓、版行年代を列挙すると次の通りである。

物語名	卷数	作者	年代	備考
仁勢物語	二	鳥丸光広(伝)	寛永正保期	
伊勢物語ひらことば	四	紀 暫計	延宝六年	業平物語
伊勢物語通補抄	一	志水燕十	天明六年	
おさな源氏	十	野口立圃	寛文年間(?)	
紅白源氏物語	六	梅 翁選	寛永四年(版)	
犬の草子	二	?	寛永十一年(版)	足利期作か
おちくぼ物語	二	?	万治二年	小おちくぼ
大方文記	一	今 長明	天和二年	
寛瀾平家物語	六	江島基碩(?)	寛永七年(版)	
吉原つれづれ草	五	結城屋米示	正徳年中(?)	
新つれづれ草	一	平賀鳩溪(?)	宝暦明和期(?)	
茶人つれづれ草	一	?	?	

歴史的な一つの事象が、出現する為には、その出現を可能ならしめる理由、原因が存在する筈である。その理由、原因と、生じた事実との関係を必然と見るならば、歴史の全ての事象は必然的な現象と見なければならぬが、それはともあれ、近世に至り擬物語の出現を見た事には、それ相応の原因が存在する筈である。その原因が単一の場合も考えられるだろうし、又互に交互する複合的な場合も考えられる。

併し、私は単なる一つの原因や動機のみを、この擬物語の發生の原因とはしたくない。

- 一、印刷術の發達に伴う書籍の普及
- 二、徳川氏の強力な統一と対国家意識及び国学の發達
- 三、庶民層の發展

四、近世生活面における現実性等、交互に関係し合つて擬物語の發生と云う事象の事を説明したいと思う。

## 二

本稿で考えを述べる時、テーマに関して、二つの見解が考えられる。

その一つは、諸擬物語の内容と社会相との関係であり、他の一つは歴史的、別に云えば文学史上での擬物語の価値の問題である。しかし両者共に全くの別な価値をもっていると云う性格のものでないので前後して考えて見ようと思う。

日本の文化史を眺める時、奈良平安時代は、周知の様に、特殊階級つまり、上流貴族に独占された貴族色一色の文化であった。

それが、鎌倉期に入り、武士への政權の移行に伴い、前代までの文化面におけるきらびやかさ、繊細さは、逸しはしたものの新興の武士の性格をそのまま表示する質実剛健さを加味した文化への指示を示しはじめる。

更に進んで、室町期、安土桃山期に至るに及び、庶民層の成長に伴い、文化面には著しい庶民性を見る事になり、江戸時代へと展開する。

安土の桃山期以後、鄉村制の發展に伴う庶民層進展には著しいものがあるが、それはしばらくおとくとして、各地の城下町をはじめとする都市の驚嘆すべき發展、とりわけ大阪と江戸とのそれには特に注目しなければならない。

そして両者を母胎としたものが、近世日本の文化史の上で、二つ

の大きいピークを構成した。

すなわち、一つは元禄文化であり、一つは文化文政（化政）の文化である。前者は上方（大阪）を中心に、後者は、江戸を中心に盛花を結ぶに至る。

俗に云う低俗文学の盛行は室町以降であるが、擬物語と社会相との関係は、この低俗文学（俗文学）の分野で触れて然るべきかと思ふ。

### 三

中世以降、日本文化史上で、極めて意義を深く評価されている事実として、桃山期、豊臣秀吉の朝鮮出兵に際して、日本側に伝来された云う印刷術と云う問題がある。

この技術の伝来は、あたかも、平安時代に仮名文字の創造によって、女流作家群の輩出を見、物語類の盛行を喚起した現象に類似しており、印刷術の伝来は、決して過少評価すべき問題ではない。

文禄二年、後陽成天皇が、勅版として古文孝経、及び錦繡段、日本書記神代巻の版行を企てられ、次いで、後水尾天皇の元和七年の銅活字本、皇末事宝類の開版、等は、未だ庶民層には、関係程遠い文化的企てではあったものの、文化史面においては近代活字本の先駆と云う意味で重要であろう。

更に、いよいよ徳川期に及び、家康は、木活字を用い「孔子家語」「貞観政要」「吾妻鏡」を版行した事は、新規伝来の印刷術なるものが如何に歓迎されたかを証するものであらう。

「此五三年、摺本と云う事仕出、何の書物をも於京都摺之、當時是を判と云う、未代の重宝なり」（当代記巻五）

と見える事実を見ても、その歓迎ぶりは察せられよう。

時代的には、前後するが、この様な為政者の活字本の版行の鼎は更に広まって私的な刊行物をも見る事になる。

即ち、角倉本や、饅頭屋本の刊行が、それである。

角倉了の子与一は慶長十三年に、平仮名を用いて、伊勢物語を版行し、続いて古今集、平家物語、徒然草、源氏物語の版行を試みているが、彼のこの企画は、日本近世に、国学の発展を見た事と相関して擬物語出現の最大の起因をなしている。

つまり彼の企ては、ここに云う低俗文学の発生、波及に極めて大きい影きよを与える結果となる。

一般に、公式的見解であるが、近世文学は庶民文学と云われている。

事実、江戸時代に至ると、文学面においては、いちじるしい庶民性を加えて来る事は、庶民的、娯楽的文芸として現れる「可笑記」（寛永十九年版）を以て先駆とする仮名草子の流行によっても証され得る。

しかし、私の問題としたいのは、この様な単なる戯作的な低俗、庶民文芸を指すのではなく、より諷刺的に、より世相の欠陥をあばき得る様な擬物語について、この発生の原因を解し得たい所にある

### 四

新潮社発行、藤村作編、縮約日本文学大辞典七八二頁の「仁勢物語」解説の項に、

「併し当時の歌人国学者が徒らに、古書の註釈に没頭した時に、我が古典文学を、無雑作に、狂文化した点は、特に注目し値す

との解説が見えるが、私としては、むしろこの二者がつまり、当時の国学者の活動——国学の隆盛——と擬物語の盛行とを、相對的關係、表裏的關係としてとらえて見たいと思う。

と云う論の、基本的支柱となるものは、若し、印刷術の發達に伴う書籍の普及、庶民層の成長。近世生活面における現実性と云う問題のみで、近世文学史を見るなら、擬物語（私は厳密にはより風刺狂文化された浮世草子と呼びたいが）ないしは、擬物語的な文芸の盛行を見る必要なく、俗に云われる井原西鶴らを開拓者とする浮世草子類、つまり当代の世相描写を主眼とした割にまともな物語類の盛行のみで、全てが終始してよかつたのではないかと考える故である。

例えば、江戸天和期に端を發して、人々の間に好評を博した西鶴の浮世草子「好色一代男」については、構想上では、たしかに「源氏物語」的ではあるが、内容上は、世之介なる好色男の一生を書き記したものでしかなく、当時の享楽生活を、世之介なる人物を登場させる事により描写しすぎない。

※麻生磯次著 日本文学史参照

叢書に収録されている擬物語中「新つれづれ草」は作者は明確ではないが、平賀鳩溪ではなからうかと云われている。

しかし、一体それが、確實であるか、誤りであるかは、さておいても、彼が江戸期に戯作生活をしている事もあるので関連する事実としてとり上げて見よう。

平賀鳩溪と云えば、知る人は少なからうがそれは、平賀源内の号

であると記るせば、合点行く者もあろう。

周知の様に、源内は、人も知る科学者であり乍ら、ある事情により後に戯作方面で意を晴らさんとしている一例によって、当時盛行を見る擬物語なるものの發生を説明出来るのではなからうか。

源内は、出身は、讃岐高松侯の足輕平賀定右衛門の子で、成長の後、長崎に出てオランダ語を学び、本草学者となった。

宝曆年間江戸に出て（宝曆三年）三浦瓶山に儒学を、賀茂真淵に国学を学んだ。

彼は、この間にしばしば長崎に向き、電気機械の研究もなし、又、本草学の利用による甘蔗の培養なども研究している。

しかし、当時、町人層の経済的な發展を実際に体験して、財力の偉大さを知り、利殖に意を注いだのが成功せず、この不満は、戯作方面へと傾注されたと云われる。

即ち、儒、国学を始め、ヨーロッパ知識により洗練された彼の感覺は、彼独特の狂文の創造を可能にしたものらしい。

滑稽本、洒落本、浄瑠璃の各分野に亘って彼の活躍が見られる。

※平凡社刊日本文人名辞典より

実は、この様な問題が、勿論時期的には、前後するものもあるが擬物語——浮世草子中より風刺、狂文化を試みたもの——の發生の起因をなしているのではないかと云う疑問、それが、私のとり上げようとする「擬物語と社会相如何」と云う課題の一つの面である。

豊臣氏より政權を移管された徳川氏は、中央、地方共に、その支配体制強化の為に強力な組織を創造したが、それに加えて要求される事は、中央集權的な組織に思想的な基礎付けを与える事であった

つまり、幕府の権力支配を倫理的に合法化する事は是非共早急を要する問題であったが、このより処として着目されたのが、儒学の  
大義名分論に外ならない。

徳川氏の林家の起用はこれを具体化したものであった。林家、羅山は、儒は実で公、仏は虚で私であると説き、仏教では、入倫を逸し、仁義忠孝から離脱した空虚のものでしかないと言き意気まいて  
いる。

※児玉幸多著、江戸時代（前期の社会と文化）参照

この儒学の官学化に伴う盛行に同時して、当時代には、国学の著しい発達の問題がある。

近世の強力な国内統一は、対外的には、国家意識の自覚を生じ、  
国体觀念の喚起を見る。

古道闡明をスローガンとする国学者の輩出、古典籍の注釈の続出  
さては神道研究などと、古道究明熱は高潮に達した感がある。

私のこの稿で意図している論旨の核心はこの国学問題に触れる事  
によって本論に入るとも考えられる。（未完）

（別大付属高校教諭）